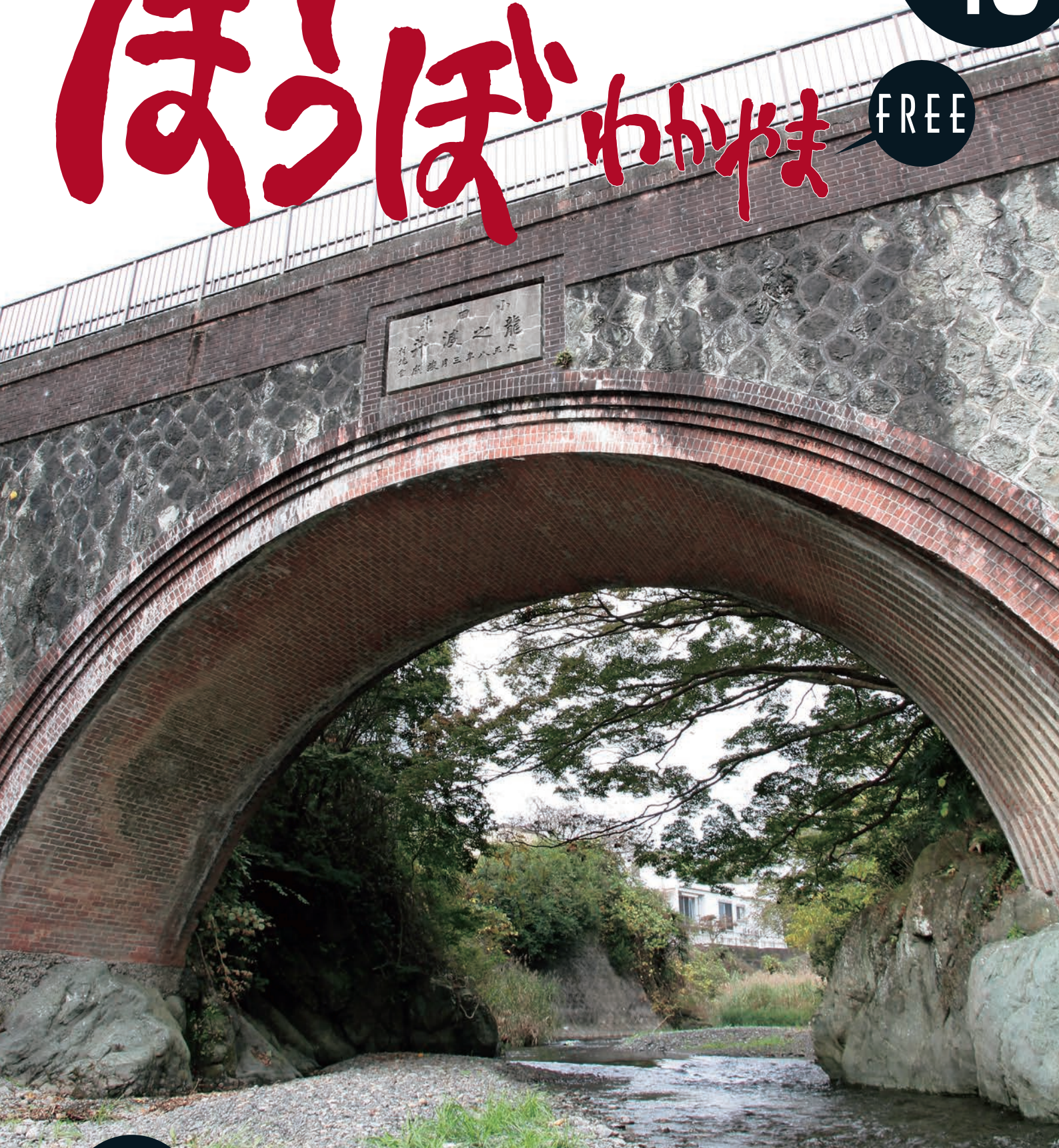


ふるさと再発見！

vol. 16

ほろほろわかやま

FREE



巻頭
特集

小田井用水

紀の川北筋を潤す大動脈

歴史・文化

散策

施設紹介

I♥WAKAYAMA 私の和歌山

黒暗獄の闇饅頭

江戸時代から続く紀州漆器のまち 黒江

無量寺・串本応挙芦雪館

歴史・文化・自然が満載のまち 海南市へようこそ



龍之渡井の改修工事

それまでは木製だった通水橋・龍之渡井は大正時代に近代化され、レンガ・石張り造りに改修された

干ばつ常襲地帯へ水を運べ
紀の川北筋を潤す大動脈

小田井用水

河岸段丘を開発せよ

橋本市から和歌山市に至る紀の川北岸の地域が、古くから干ばつに襲われやすかったことには理由がある。一帯は紀の川の流れが生み出した河岸段丘で、直接水を引くには土地の標高が高く、また溜め池だけでは水量が不足だった。その問題を解決し、紀の

現在、紀の川の北側一帯には多くの水田が広がり、県内有数の田園地帯となっている。しかし、かつてはたびたび干ばつに襲われ、「月夜にやける」（月夜でもかわいてしまう）と言われるほど水の便が悪い土地だった。転機が訪れたのは江戸時代。現在の橋本市から岩出市まで、紀の川の水を運ぶ大土木工事が行われたのだ。紀の川北筋の農地を潤す大動脈・小田井用水の開発である。

川の豊かな流れを水源とする用水の開発が行われたのは元禄期。まずは元禄13年（1700）、藤崎井（現紀の川市那賀町）を取水口とし、和歌山市東部に至る藤崎井用水が完成した。藩命により、その開削に取り組んだのは、「治水の神様」と呼ばれる大畑才藏である。

続いて宝永4年（1707）には小田井用水の開削工事を開始。橋本市高野口町から紀の川市名手市場にかけての第一期工事を一年足らずで完了させた。取水口は高野口町小田。藤崎井よりもはるか上流にあり、より複雑な地形を通す難工事だった。





紀の川の小田井堰流失仮工事

明治42年、増水により小田井堰が流失。説明書に「土俵ニテ埋立ヲナス 対岸二点々トアルハ入レ置キタル土俵ナリ」とあり、土を詰めた俵を沈めて緊急の堰としたことがわかる

『大畑才蔵』平成5年 橋本市発行

大畑家が所蔵する記録を活字化した資料集で、「才蔵日記」をはじめ、「普請方覚書」「村々見聞書」などが類別収録されている

精密な「工事設計図」

段丘に水を引くためには、

標高の高い上流に取水口を求めなければならない。その結果、第一期工事の区間は約21kmとなり、第二、三期の工事を経て、総延長は32・5kmに及んだ。それほど遠くから水を引くためには、正確な「設計図」が必要だった。

才蔵が記した御用日記『才蔵日記』には、土地の高低差の正確な測量結果にもとづいた工事の指示書が残されている。それは、開削すべき水路の高さ、幅、勾配などが約100m単位で示された精密なもので、現在の土木工事にも通じるような「設計図」となっている。

土木工事には各地区の農家が協力した。わずか一年足らずで第一期工事を完成させることができたのは、この設計図に従い、各地で一斉に作業を進めることができたからに

ほかならない。

完成、改修、その後

小田井用水が完成したことにより、1046町歩（約1035ha）の水田が新たに開発された。それだけの水田を潤し続けるため、小田井用水は完成後も度重なる改修を行うこととなる。

河岸段丘の複雑な地形をクリアするために用いられた通水橋は、もともと木製の掛樋で作られていたが、大正時代にレンガ・石張り造りのアーチ橋に改修された。龍之渡井や小庭谷川渡井などの通水橋は今でもその姿をとどめており、紀の川の水を運び続けている。

また、紀伊半島一の大河・紀の川から水を引いているため、水害に見舞われることもあった。明治四十二年（1909）には、増水により取水口の小田井堰が流失。堰を復旧させる仮工事の様子

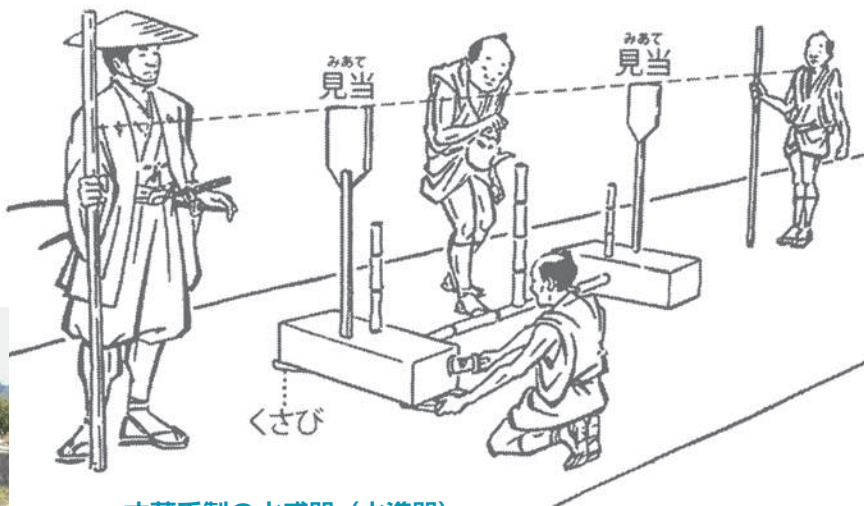
紀の国の「農」を支える

が記録写真に残されている。現在、小田井用水が潤す水田は約600ha。精密な設計図をもとに開削された水路は、何度も改修を重ねながら、今なお現役だ。元禄の昔から、小田井用水は紀の国の「農」を支える大動脈であり続けている。



伏越(サイフォン)

段丘地形を流れる谷川に対処するため、川床の下に水路を通す伏越(サイフォン)を採用した。写真は中谷川水門



才蔵手製の水盛器(水準器)

真ん中の竹に水を入れて両方の竹から出る水を見て水平を定めた。※橋本市の杉村公園内にある郷土資料館に当時の道具が展示されている。

小田井用水 あれこれ

水平を測る道具

紀ノ川の水をはるか上流から引いてくるためには、用水の勾配をできるだけ水平に近づける必要があった。そこで用いられたのが、大畑才蔵手製の水盛器だ。水を使って水平を定めるもので、正確な測量の結果、水平に近い緩勾配の水路を実現することができた。

江戸の最先端技術

紀北地区の河岸段丘には中小河川による谷間が多い。水平に近い勾配の水路をその谷間に通すために、「伏越(サイフォン)」や「渡井(通水橋)」が設けられた。伏越は、川床をくぐらせて通水する方法。渡井は川の上を通すもの

文化財として

平成18年(2006)、龍之渡井(紀の川市西野)をはじめ、中谷川水門(かつらぎ

で、当初は木製の樋が用いられた。特に穴伏川を通す「龍之渡井」は、橋脚のない21mの樋を渡す難工事だった。小田井用水には8カ所の通水橋と9カ所のサイフォンがある。

小庭谷川渡井

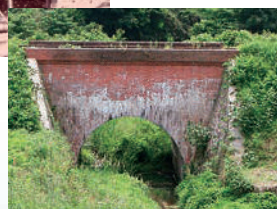


工事前



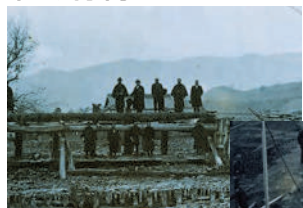
工事中

木積川渡井

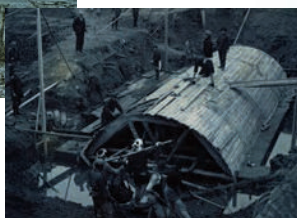


現在

中谷川水門



工事前



工事中

町中飯降)、小庭谷川渡井(同町笠田東)、木積川渡井(紀の川市西三谷、岩出市東坂本境界)の4施設が登録有形文



粉河寺境内の「彰功乃碑」。
大正14年建立

大畑才蔵

寛永19年(1642)~享保5年(1720)
伊都郡学文路村(現橋本市)生まれ

学文路村の農家に生まれ、父のあとを継いで庄屋となった。元禄9年(1696)、紀州藩の役人であった井澤弥惣兵衛為永により工事担当の役人に取り立てられる。この年から藤崎井用水の開削に取り組み、宝永4年(1707)には小田井用水を開削した。『才蔵日記』や、『水盛帳』『雑記帳』などの資料によると、役人としての才蔵は、計算に強く、農政事務にも優れた実務家だったようである。下級役人で通したことなどから、農民のために尽くした庄屋の顔を持っていたと考えられている。



化財に登録された。県内の土木構造物としては初めて。

水管理の難しさ

小田井用水は、3から5kmで1m高低差という緩勾配、さらに、当初は土水路だったこともあり、漏水などで末端まで水が届かないこともあった。取水口の井堰も木と石でつくられたもので、洪水のた

びに流され、復旧に骨を折った。近代に入り、水路や通水橋は改修が加えられていたが、井堰が現在のような姿になったのは、昭和32年(1957)。昭和28年(1953)の紀州大水害に伴う災害復旧事業によるもので、それからは井堰の位置は変わらず、用水のスタート地点として活躍を続けている。

「小田井」の歴史、次世代へ

小田井用水を次世代に伝えていこうと、最近ではその歴史や特徴について、子どもたちが学ぶ機会が多くなっている。

小田井用水を開削した大畑才蔵と井澤弥惣兵衛の物語は、浜口梧陵、華岡青洲らとともに和歌山県の小学校3・4年生社会科副読本で紹介されている。龍之渡井や頭首工(取水口)への遠足や見学も多く、地元

の偉人や技術について直接目で見て学ぶことができる」と好評だ。

このほか、小田井用水を新たなかたちで活用しようという取り組みも進められている。橋本市高野口町名倉では、小田井用水の一区画が歩行者用の公園として整備された。水路の上部を歩道化したもので、「せせらぎ公園」の名で住民に親しまれている。



せせらぎ公園

闇饅頭

くらがりまんじゅう

江戸中期、庶民のあいだでおかげ参りが流行していたころ、街道沿いの名物として名高い幻の饅頭があった。明治以降の近代化の流れの中、街道の時代の終焉とともに姿を消した「闇饅頭」とはいかなるお菓子だったのであろうか。

饅頭伝来の道

日本での饅頭のルーツは大きく二つの系統に分けられる。

ひとつは、鎌倉時代の僧・円爾弁円えんにべんえんが仁治2年（1241）、宋留学から帰国した際、博多で茶店を開いていた吉右衛門という人物に伝えたと言われる酒饅頭。

もうひとつは、室町時代の貞和5年（1349）、建仁寺の高僧龍山徳見りゅうざんとくけんが元から

帰国する折にともに来日した林浄因りんじやういんが奈良で菓饅頭を作って売り始めたというものである。



闇饅頭屋看板

街道の時代と闇饅頭

江戸時代になると、饅頭は種類や材料も豊かになり、菓子職人らの手で様々な饅頭が生み出されることになる。

下兵庫村（現在の橋本市隅田町下兵庫）の黒暗嶽は大和街道沿いにあり、伊勢参宮の送迎等、大勢の人が集まる場所であった。その黒暗嶽の茶店「闇饅頭屋」で作られていたのが闇饅頭である。

海南市に伝わる盆踊り唄「お蔭参り」の一節に

“走る橋本 早や駆けぬけて
暗がり坂を やみ無性
わしとお前と合せ
饅頭の名物買うて
連れと持乳のせんざいや”

とあり伊勢参りの道中の名物として知られていたことがわかる。

名所図会にみる闇饅頭

江戸時代後期の「紀伊国名所図会」には茶店で忙しく働く人や、饅頭を口に運ぶ旅人の様子が描かれ、次のような詞が添えられている。



闇饅頭屋に残った菓子木型





「黒暗嶽名物夫婦饅頭甘サ
草津姥之餅二負ス 唐邊木」

「姥之餅」（姥が餅）は、東海道五十三次草津宿（滋賀県草津市）の名物で「小餅をこし餡で包み、上に小さな白い餡をつけたもの」で、静岡市の安倍川餅と並ぶ名物である。それにも負けない美味しさという闇饅頭とはどういったものであろうか？

橋本市郷土資料館に残る木型からは蒸し饅頭ではなかったかと推測される。

さて、同じ伊勢街道沿いの奈良県桜井市黒崎で、こちらもちつての名物とされた饅頭が有志の手により再現されている。江戸時代の名所案内「西国三十三所名所図会」に描かれる「婦夫饅頭屋」の「婦夫饅頭」である。

紅白のこし餡入り饅頭と酒饅頭でつぶ餡を包み込んだ3層になっている饅頭で、めおとの漢字が婦が先に来る字になっている。同じ伊勢街道沿いにあり夫婦饅頭と呼ばれた闇饅頭とは対になるお菓子だったのだろうか。

和菓子の再興

近年、和菓子離れが叫ばれる中、静かな和菓子ブームが起きつつある。



現在の黒暗嶽周辺（橋本市隅田町下兵庫）

大きなきっかけとしては

「和食」がユネスコの世界無形文化遺産に選ばれたこともあり和食の一つである和菓子は文化に目が向けられている。

美術館や博物館などで和菓子テーマとした企画展が開かれ、また前述の「婦夫饅頭」のように、かつての和菓子を復活させようとする動きも見られる。

日本を代表するお菓子どころである鳥根県松江の美保閑町では、まちづくりの女性グループが古くから伝わっていた「かた菓子」という「炒つ

たお米を砕き、砂糖と水を加え、木型に入れて乾燥させた」お菓子を復活させた。沖縄では琉球王朝時代のお菓子「千寿糖^{せんこう}」が30年ぶりに再興している。

同じように橋本市の闇饅頭も復活させることはできないだろうか。

紀州の和菓子と文化を考える会の代表、鈴木裕範氏に次のような構想を聞かせていただいた。

「城下町の時代のお菓子は今ではほとんど残っていないが、菓子木型とともに絵手本（菓子の名前・材料・造形を書き記したもの）が残されているものがある。これらを中心に菓子職人の手でお菓子を再現することが可能だ。橋本市の闇饅頭も地元の方々とへの思いと協力のもと同じように再現ができるかもしれない」

かつての名物に再会できる日を楽しみにしていきたい。

紀州の和菓子と文化を考える会

2014年に駿河屋問題をきっかけに市民の有志が中心となって立ち上がった。魅力ある和菓子の町を歩くウォークや、菓子職人らを招いて話を聞くほか、かつて存在した紀州の菓子の復活など、様々なイベントを通して和菓子を味わい、文化を学びながら、和菓子のある魅力的なまちづくりをめざしている。

鈴木 裕範 紀州の和菓子と文化を考える会代表／和歌山大学南紀熊野サテライト客員教授



会報「わ菓子通信」

江戸時代から続く 紀州漆器のまち

黒江くろえ

紀州の名水「黒牛の水」によって育まれてきた酒造の歴史、
江戸時代から受け継がれてきた紀州漆器の伝統。
そんな歴史と伝統を身近に感じてみる。

JR 海南駅を出発し、北へ約500m進むと鳥居が見えてくる。まず訪れたのが**柿本神社**、祀神は、商売繁盛、交通安全の守護神として知られる天照皇大神だ。ここから海南から黒江への路地を進み、永正寺を過ぎ、しばらくすると黒牛茶屋が見えてくる。

黒牛茶屋の喫茶スペースでは酒造の空気を感じつつ、しばらく休憩する。

次に向かうは**黒江ぬりもの館**。川端通りを少し歩き、歴史を感じる町並みを感じながら進むと、見えてくるのが築150年の古民家を改修したという同館だ。中には、漆器や雑貨の販売、伝統工芸の体験、カフェなどがあり、特に地名にちなんだ真つ黒なスイーツ「黒江パウンド」などは、味もよく評判だ。

黒江ぬりもの館を後にし、路地を進んでいくと**池庄漆器店**が右手に見えてくる。創業明治6年と古く、国の登録有形文化財にも登録されている店舗は、今でも5代目が営業を続けている。

路地を抜け、川端通りに合流すると漆器資料や紀州漆器の展示・

販売を行っている**うるわし館**へたどりつく。その後、再び川端通りへ。北側の路地へ入っていくと、のこぎり歯状の家並みが見えてくる。江戸時代から続く歴史ある街並み、この街並みの途中で目を引くのが、レンガ造りの建物だ。かつては漆工場であったが今は、倉庫となっており、少し寂しくもある。

そのまま道なりに進むと、**中言神社**の参道にさしかかる。参道を進み階段を上ると、お社へたどりつく。ここでは夫婦神をまつっており、子供の健やかな成長を守り、縁結びなどにもご利益があると言われている。境内では紀州名水の1つ「黒牛の水」も湧いており、茶道や書道などの伝統芸術の上達にも効能があるとされている。

中言神社から南へ進むと、城山トンネルを抜けて少し進んだところの交差点に近づく、甘い香りが漂い始める。海南名物の「**ずばら焼き**」のお店だ。いわゆる回転焼きだが、焼き立てをホクホクしながらいただくのが楽しい。そのまま市街を東へ歩いて行きJR海南駅へと戻る。



中言神社

黒牛茶屋

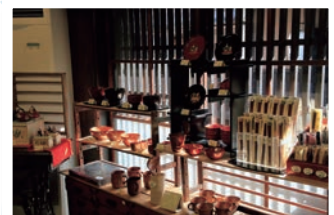
のこぎり歯状の家並み

黒江ぬりもの館

うるわし館

池庄漆器店

⑤ 海南黒江局



④ 黒江ぬりもの館

古い町家を改修した店舗では、漆器の展示・雑貨やスイーツなども販売している。その他にもオリジナルの皿・プレートが作成できる「体験教室」も行われている。



⑤ 池庄漆器店

創業明治6年と歴史あるお店であり、築200年以上の実店舗は国の登録有形文化財にも指定されている。



⑥ 紀州漆器伝統産業会館 うるわし館

1階は展示・販売コーナーとなっており、漆器や漆塗りバイク等が展示されている。またここでは、漆器蒔絵体験（※要予約）を行っており、紀州漆器の伝統の技を体験することができる。



② 永正寺

1504年建造と500年以上の歴史があり、紀州徳川家の長保寺参詣の際には、ここへ訪れるのが恒例であったようだ。



③ 黒牛茶屋

店内では酒類やグラスを販売している。奥では、酒樽などの酒造りの道具を再利用した机や椅子が並び喫茶スペースとなっている。ここでは、きき酒をすることもできる。

② 永正寺

ずばら焼き

⑨



⑧ 中言神社

日本では珍しい、夫婦の神様を祀っており、境内では紀州名水「黒牛の水」が湧いており、すぐそばには黒牛像が鎮座している。



⑦ のこぎり歯状の家並み

川端通りから少し中の方へ入ると、のこぎり歯状に家が立ち並び、かつては海に面しており、埋め立てた土地に家を建てていった名残としてこのような景観となっている。



⑨ ずばら焼き

ずばら焼きは1個95円。黒餡・白餡・カスタードの3種から選べる。創業50年以上と昔から地元の人に愛されつづけている。



① 柿本神社

JR 海南駅のすぐ近くにある神社。ここでは通常のおみくじとは別に、珍しい「水みくじ」で水占いを体験することができる。



柿本神社

①

● 海南中央市場

P

スタート

ゴール





ダイナミックで愛嬌たっぷりの虎図

古利名画で 無量寺・串本応挙芦雪館

本州最南端の地、串本町。この地に江戸時代の絵師 円山応挙と、その弟子 長沢芦雪の作品を堪能できる場所がある。

境内にある

小さな美術館

町なかの商店や民家が立ち並ぶ狭い通りを抜けると「錦江山 無量寺」がある。ここは別名「芦雪寺」とも呼ばれ、その境内には小さな美術館「串本応挙芦雪館」が併設されている。江戸時代中期に活躍し写実的な作風で知られる円山応挙（1733～1795）と、その弟子で師とは対照的に奇抜な作風で知られる長沢芦雪（1754～1799）の作品を中心に、室町・桃山・江戸時代の近世絵画や現代彫刻のほか、地元の笠嶋遺跡から出土した考古資料などが所蔵・展示されてお

り、全国から年間約4千人の来館者が訪れる。

師匠の代わりに串本へ

なぜ、京都で活躍した応挙や芦雪の作品が遠く離れたこの地にあるのか。その理由は、無量寺の歴史にあった。無量寺は、もともと海に面した袋地区に建てられており、幾度もの津波の被害に見舞われていた。宝永4（1707）に発生した宝永大地震による大津波は、建物すべてを流出してしまった。それからおよそ80年後の天明6年（1786）に文保愚海（生年不詳～1803）の奔走によって、現在の地に再建され

る。若かりしころ、修行中の身であった愚海は、京都の東福寺に滞在中に若き絵師応挙と親交が深かった。

応挙は愚海に「いつか一寺を建てることがあれば、寺のためにこの筆を揮おう」と約束を交わしていたのだ。

無量寺の再建にあたり、とうとうその時が来たのである。依頼のために京へ足を運んだ愚海に、応挙は快く襖絵などの障壁画12面を描いた。

しかし、売れっ子として多忙を極めていた応挙は串本に赴くことができなかったため、名代として弟子の芦雪に障壁画を託して串本に遣わせた。数ある弟子たちを飛び越える大抜擢であった。

南紀の地で才能を開花

串本についた芦雪は愚海の勧めでこの地に長く滞在し、自らも寺のために「龍虎図」などを描いた。

師匠や京から離れ、南紀の雄大な自然のなかで才能を発揮し、奇抜な発想と大胆な構図で、自らの画風を確立させていく。芦雪はこの時33歳、人生の絶頂期であったともいわれている。

南紀に滞在中の約10カ月間に、無量寺のほか周辺の寺院や人々に270点余りの作品を残した。

地宝を守る人々のこころ

無量寺の障壁画は歴代の住職や地域の人々の努力によって、長きにわたり自然災害や戦火から大切に守られてきた。しかし、経年とともに破損が目立つようになる。これに心をいためた有志の尽力により昭和36年（1961）に串本応挙芦雪館が開館した。

平成2年（1990）には国・県・町の補助をうけて収蔵庫も建設され、国の重要文化財である障壁画55面は町ぐるみで守られている。

現在では、応挙や芦雪の描いた実物は収蔵庫に収められており、雨の降る日は見るこゝろとができない。天気が良ければ、美術館にありがちなガラスに遮られることなく、2人の卓越した描写力や画風の違いを直に鑑賞できる。



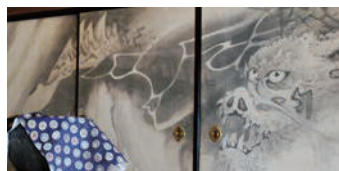
国重文が収納されている収蔵庫

本来の姿を体感

障壁画の精巧なデジタル複製画が、再建当時の配置のままで設置されている方丈（本

堂）も、見どころのひとつだ。再現された障壁画が建物と一体になることで、江戸時代屈指の絵師2人による空間演出を味わうことができる。

14代将軍徳川家茂も宿泊したという一番格の高い上間一之間は、波間に仙人が描かれる幻想的な構図の「波上群仙図」など応挙の作品のみで構成されている。中央の室中には芦雪の代表作である「龍図」と「虎図」が向かい合わせてにらみ合っている。



頭部と前爪のみで表現された龍図



再建祝盃(応挙作)朱漆塗金時絵

郵便はがき

料金受取人払郵便

和歌山中央局
承認

258

差出有効期限
平成28年3月
31日まで

和歌山市市小路153-1
紀の川ビル2F

株式会社 ウイング
「ほうぼわかやまクイズ
& プレゼント」係



応挙によって描きだされた異空間

読者の皆さんも、応挙と芦雪が意図した“本来の姿”を現地で体感してみたいかがだろう。

錦江山 無量寺・串本応挙芦雪館

和歌山県東牟婁郡串本町串本833 / TEL 0735-62-6670

ホームページ <http://muryoji.jp/>

【開園時間】9:30～16:30(入園は16:00まで)

【休館日】年中無休

【拝観料】

本館および方丈障壁画(デジタル複製画)……………700円

本館・方丈障壁画(デジタル複製画)および収蔵庫…1,300円

(いずれも中学生以下は半額)

【交通アクセス】

●電車：JA紀勢線(きのくに線)串本駅より徒歩で約10分

●自動車：紀勢自動車道さみ南ICより串本方面に約24km

※展示替え、その他の都合により臨時休館することがあります。

※作品保管の都合上、雨天の際は収蔵庫の拝観はできません。

また法要が行われている際には、方丈の拝観はできません。



ふりがな						
お名前						
年齢	歳	性別	男	女	ご職業	
ご住所	〒					
電話番号						
クイズの答え	1	・	2	・	3	※あてはまるものを1つお選びください。
本誌の入手場所						

※応募くださいました個人情報は、プレゼントの発送及び弊社からのお知らせ以外には使用しません。

歴史・文化・自然が満載のまち 海南市へようこそ！

海南市長 神出 政巳

今号で取り上げて頂いた黒江地区をはじめ、海南市には歴史的な文化に彩られた場所が数多く、熊野古道「紀伊路」が通るここ海南市は、熊野聖域への入り口とされています。

中でも五鉢王子の一つである藤白王子から藤白塔下王子に至る藤白坂は古道の雰囲気の色濃く残され、今秋、国の史跡に追加登録が決定されたところです。

更には、県内の国宝建造物7件の内、実に4件が海南市下津町内に建立されているなど、古の魅力が満載のまちです。

また、温暖な気候と黒潮の恵みを受けて、おいしい食材も揃っています。

特に、収穫したみかんを土壁の蔵に貯蔵し、甘みと酸味をバランスよく仕上げて出荷する「本貯蔵みかん」や、ビワが全国的に知られています。

他にも、みかんとお菓子の神様を祀る「橘木神社」や、全国200万人の「鈴木姓」のルーツといわれる「鈴木屋敷」など、知って頂きたい観光スポットや地場産品がまだまだ沢山あります。ぜひ一度、海南市の魅力を体験して下さい。



神出市長



国宝 長保寺

編集後記

こんにちは、「ほうばわかやま」の16号が完成いたしました。読者のみなさまには、2015年もご愛読くださり、ありがとうございます。

今回の特集で取り上げた小田井用水のお話は、感動的です。表紙の写真にも登場するアーチはレンガの積み方がとてもユニークなのだとか…。この記事を通して、昔の人が築いた遺産を知り、次世代へと引き継ぐ原動力に貢献できればと思います。

「I Love Wakayama」には、今回の散策の舞台「海南」から神出市長がご寄稿くださいました。海南は今回の記事以外にも、名草戸畔伝説など取り上げたい話題がたくさんある地域ですね。

さて、誌面に葉書を刷り始めたてから、読者のみなさまからのお声も徐々に増え、前号では160通もの葉書をいただけるようになりました。「和歌山にも素晴らしいものがあるんですね」「もっと知りたい、楽しみにしています」という喜びのお声に、これからも知られざる和歌山の素晴らしいところを掘り起こしていこうと編集部一同、意気込んでおります。来年も、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。 第16号編集長 岡 京子



株式会社ウイング／印刷物を中心に販売促進のお手伝いを専門とする会社で、「ほうばわかやま」の発行や本づくりを通じ、文字による地域文化の振興を目指しています。自費出版のご相談はウイングまで！
[沿革] 創業 1972 年。設立 1981 年。

「ほうばわかやま」発行について

和歌山の歴史・文化を掘り起こし郷土愛を育む一助になればと、弊社が自費で2008年から年2回発行している情報誌です。また、この活動を通して、郷土と社内の活性化の両立を図ることを目的としています。

ほうばわかやまのバックナンバーは弊社ホームページからもダウンロードできます。

詳しくはウェブで検索→ <http://w-i-n-g.jp>

ウイング 和歌山



お問い合わせ先 ☎0120-136-700

協力機関

本誌を作成するにあたり、次の機関・団体にご協力をいただきました。
(順不同・敬称略)

海南市 和歌山県土地改良事業団体連合会 小田井土地改良区
橋本市郷土資料館 紀州の和菓子と文化を考える会 無量寺・串本応挙芦雪館

クイズとアンケートで 当たる!!

クイズにお答え頂いた方の中から抽選で
「串本応挙芦雪館えはがき」を
合計8名様にプレゼント!!

問題

小田井用水が水を引いている川の名前は？

ヒント

本号のどこかに
答えが載っています

①淀川 ②四万十川 ③紀の川

Vol.15の答えは「①高野六木」でした。

応募方法

このハガキの各項目をご記入後、切り取って投函(切手は不要です)
もしくはメールにてご応募ください。 houbu@w-i-n-g.jp

メ切 2016年3月末日



本誌へのご意見・ご感想

ご協力ありがとうございました。